

〈質疑応答〉

会場 「煩惱即菩提」とありましたが、この中の「即」というのはどのような意味でしょうか。学問的にはなく、われわれの日常生活の中でこれと考えるとどうなりますか。

柳澤 「即」はそれがそのままという意味です。道元禪師は生死を離れては涅槃はないといわれたと思います。これが「即」だと思います。

矢島 柳澤先生がおっしゃられたようなことで、A即Bというのは、Aを離れてはBはないということです。たとえば、色即是空、空即是色というとき、色と空は全く別のものですが、互いに離れては存在しないということ。生死即涅槃も、生死と涅槃は対立的なものです。互いに相即しているというわけです。

柳澤 もう少しいえば、対立しているものを考えてはいけないということです。臨済の公案の工夫で、二つのもの考えることではなく、一つになったもので答えを出せということを良くいわれます。こういうものを字句で解釈して、わかるわからないを期待しているのではなくて、生死はそのまま涅槃だと、道元禪師はいわれたかっただと思います。

会場 先生は、道元が「こだわりを捨てよ」や、「心が無い」といいながら「仏の前に立て」といつていることを

柳学生に教えておられるのですか。

柳澤 わかるように学生には教えています。道元禪師は場合によって表現を変えられたということですが、対象を求めて何とかしろとはいわれません。自分がそうなりなさいといえます。だから自分が仏になれます。仏様を拝みなさいとは、絶対にいってないはずですが、敬意を表する方法などは、学生に教えますが。

会場 秋葉原の無差別殺傷事件では、「そんなの関係ない」という一言に問題が集約されていますが、そうじゃないことを学校で教えておられますか。

柳澤 ああいうことをやる人物が出てくると、責任の所在探しになります。責任の擦り合いになりますが、学校教育で少々まずいことがあったのだらうと思います。人としてやっていいこと悪いことは、子ども時代に教えないといけない。かといって、すべての親が手本になる生活をしているわけではありません。学校だけが教育の場ではありません。社会生活をしながらも教育されていない、ということが問題です。彼は体や頭は大人になっただけで、幼兒的だと思います。

会場 「同事」の解釈で、「協同」は適切ではないということですが、立松和平氏の「人はみな同じという認識」があります。「同じ」とは微妙な表現です。「同事」の解釈を再度お願いします。

矢島 私は平等という普遍的な側面と、同化という実践的側面を合わせ持つものだ、と説明しました。同事について、ただ仲良く仕事をするなどの説明がおうおうにしてあるので、そうではないと思いました。インドの倫理原則、伝統的な宗教で大切にされていた倫理原則から、同事の「行為の基準」としての意味合いを見直したほうがいいのでは、ということでした。

儒教の「恕」の精神、己の欲せざるところ人に施すことなかれというのは、今も生きていくかもしれないが、昔のようには倫理的に共有されていないような気がします。仏教的には同事の精神を普及していきたいと思えます。同じというのは、みな苦楽、愛憎を共有しているという意味です。ただ理念的に皆同じではなくて、皆痛みを共有して共通の思いを持っていることを、学校教育の中で体験的にしっかりと学べる仕組みができればいいと思います。

会場 四摂法ですが、原語はチャッターリ・サングラハーニ・ヴァストゥーニで、サングラハは掴むという意味です。四摂法は仏道教化の方法です。私の調べでは、四摂法は、仏教徒が非仏教徒の心を掴むため、という大きな理由があります。また、パーリ仏典では、王様が民衆の心を掴むための方法として、また有名な『六方礼経』にも説かれています。ですから、あるグループが異なるグループの心を掴むために四摂事を行うことが根底にあり、その中に同事があると理解しています。

それと仏教福祉の問題ですが、忍性や性全のように、同事はお坊さんが民衆に近づいて教化する、あるいは坊さんが非仏教徒のところまで降りていって同事をする、という意味合いだと思います。その裏には、仏教徒にするといふ意味があると思います。そこまでやるべきでしょうか。

矢島 四摂事はサングラハですね。これをどう訳せばいいのか、どういう意味合いの言葉なのか、摂受とか、包み込むとか色々訳し得ると思います。パールの注釈文献など後代の文献では、同じカーストの同じレベルのグループでないと一緒に何かをできるとかできないといったように、いろんな解釈が出てきます。今のもひとつの解釈です。『六方礼経』も重要な位置にあります。社会倫理的な意味合いもここから強くなっていく気がします。

仏教徒が非仏教徒に対してというのは、ここでどうお答えしてよいか私にはわかりません。これから色々な文献をみて解釈事例を整理していこうと思います。

会場 関根先生に伺います。忍性と性全の年の差は50歳ですが、これで友人付き合いができたのか否かと、性全は道徳律を説きながら、子どものために俗人から離れていません。これは先生ご自身が研究で見つけられたのかどうか、この2点をお願いします。

関根 叡尊は89歳、忍性は87歳、性全は71歳です。「親朋」と記載があるので、「親友」だと解釈しました。彼は極楽寺に『万安方』を納めているので、「親友」といっても友人の関係ではなく、師弟関係に近かったと感じます。性全が梶原家直流であり、普通の人には入手できない書物を入手できたこと、手紙の中にあるように、「掃部頭」といわれる人とも親しい関係にあったことを考えれば、身分の上下関係や年齢もあるでしょうが、また、資料を見てみたいと思います。「金沢文庫古文書」819、835号には「掃部殿の御内」にいたとあるから、長井宗秀の支援を受けていたと思われる。

息子を想う気持ちだが、この手紙と『頓医抄』『万安方』だけに見られます。彼に人間味を感じました。両書簡には10年の隔たりがあります。高齢になってから授かった子どもだったから肉親の情が強く働いたものだと推測します。石原明先生（横浜市立大）が金沢文庫を訪れており、良く調べておられました。私自身の考えというよりも先の先生の研究に影響されているかと思えます。

会場 性全の医の倫理観に対して、晩年の評価は学会でどう変わったのでしょうか。

関根 『頓医抄』が後に大きな影響を与えることはなかったと思っています。真言律宗と同じで、『頓医抄』が広く読まれて引用されることもなかったと想われます。江戸時代に収集家・狩谷掖斎が集めたものがあります。人間の感情は常に揺れ動いていると思います。あるとき、「関根先生は倫理の授業をどうしてやるのか」といわれたことがあります。人間だれでも善悪はわかっています。どんな立派な人でも過ちをします。だから倫理の授業を通して、その時々心研ぎ澄ますためにやっていると答えました。人の心は変わることなく一生貫いて生きていけるもの、とは思っていません。倫理はいつも反省するためには必要で、性全の心が変わっても仕方ないと感じています。

矢島 先生はご本でもいくらか批判的になって、今日は人間味とかおっしゃっていますが。あちらの方は先生の本を讀んでおっしゃったのではないですか。

会場 『頓医抄』の仏教的な主張の背景をどのようにとらえておられるのか。というのは、慈悲心は天罰を蒙ること、思想的なこととはこの仏教とは違う気がするからです。また、中国の医学書『千金方』とのバランスをどう考えておられるのか。

関根 梶原性全は中国からの書物に造詣が深いです。忠恕の道、不仁、至親の想いなどが出てきます。仏教的なことがあっても真言律宗の影響からか、慈悲の心も再三出てきます。僧医と本日のテーマに出ていますが、『千金方』と『頓医抄』を比較して詳しくは調べたことはありません。医療倫理は仏教的なものより、孫思邈が書いた中国医学の影響のほうがは大きかったと思います。

終わりに

柳澤

皆様、本日は当公開シンポジウムに最後まで熱心にご参加いただき、ありがとうございました。この、テーマについては今後も掘り下げていきたいと思っておりますし、いただいたご意見ご質問を参考にしながら、研究を深めさせていただきたいと思えます。このような講演会やシンポジウムを年1回開催しておりますので、また是非ご来駕ください。本日はありがとうございました。